

8℃、雨、風という天気にとっ

OWCC 中川和道 20190415

4月10日は寒い日だった。2009年7月16日の夏山、トムラウシ山で起きた低体温症死亡遭難を思い出して中川は、ぞっとした。気温がよく似ていたからだ。

あれは、冬や積雪期ではなく夏山で、しかも、18人のうち8人が死亡するという夏山登山史上最悪の遭難事故[1]であった。事故当日、トムラウシ山に近い五色観測サイトでは、夏山だというのに12時に6℃、18時には4℃と気温が低下し、10～22 m/sの風が吹き、天気は霧雨や雨だった（[1]の気象の図③参照）。多くの人が死亡された10時頃は8℃、雨、風という天気。だから中川は「8℃、雨、風」と聞くと、ひとごとと思わずにぞっとする。2019年4月10日は、東京では小雨あるいは雨で、12時に5℃、18時に4℃と低下したから、「何だかよく似た気温だなあ」と思ったのだ。そこで、文献[1]を読み直し、あらためて考えてみた。

山での気象現象が直接的・間接的な原因となって起きる遭難事故を「気象遭難」[2]というから、「トムラウシ山2009遭難」はまさしく「気象遭難」だろう。次に浮かんだのが、「異常なあるいは(数十年に一度の)特異な気象だったから数十年に一度の重大事故になったのだろうか?」との疑問だ。文献[1]で飯田肇氏はこの疑問に正面から切り込んだ。飯田氏によれば、この地域のここ6年間平均でみると7月の最低気温は、何と、2.8℃。極値では0.2℃(93年7月)だ。

「トムラウシ山2009遭難」のさいの最低気温は3.8℃でこれらより高いが、雨と風が加わったのであの悪条件となった。こういう悪天候は、大雪山の7月では、毎年のように(普通に)起きているという。飯田氏はさらに、立山の剣御前小屋の気象データを解析し、寒冷前線通過時には、立山でも同様の気象状況が起きている可能性が高いと結論した。

普通に何度も起きている悪天候なのにあの大量遭難がおきた、というのなら、「遭難の原因は、気象の側にあるのではなく、人間の側にある」と受け取るべきである。

「人間の側にある原因」とは、第1に、悪天候に対する対応のことだが、「トムラウシ山2009遭難」では、ガイドによる引率登山なので、この問題は、別の機会に考えていこう。

「人間の側にある原因」の第2は、気象情報入手である。「トムラウシ山2009遭難」のあの場面では、ガイドは、地上の天気予報(低気圧がぬけて天気回復)しか入手できず、山に寒気が流れ込んで荒れることが分からなかった。今の私たちは恵まれた立場にある、ありがたいと中川は思った。それは、ヤマテンが2011年に営業を開始したことだ。今では、ヤマテンから毎日、山の天気予報が2日分、メールで送られてくる。スマホなら高層天気図も入手可能だ。この恵まれた条件を生かしたい、と中川は、今の社会に、あらためて感謝している。

[1] 羽根田治他『トムラウシ山遭難はなぜ起きたのか』、山と溪谷社、2010年8月。

[2] 羽根田治『ドキュメント 気象遭難』、山と溪谷社、2013年9月。